

年	組	名前
---	---	----

大分県内のバラ生産者が連携して県域ブランドの構築に取り組みます。

品種、出荷規格バラバラ 生産者連携し 大分ブランド

大分県内のバラ生産者が連携して県域ブランドの構築に取り組み、生産者ごとに異なる品種構成や出荷規格を統一して、市場のニーズに的確に対応できる態勢をつくり、県域出荷のスケールメリットを生かす狙い。オリジナル品種を開発する国内有数の生産者がいることも生かし、市場で「大分のバラ」の存在感を高めたい考え。秋ごろの規格、品質の統一を目指す。

県内は海拔ゼロに近い。重町まで産地が点在する。昨年5月に複数あった生産者の組織を「県花き生産者協議会バラ部会」に統一。ルや商談用カタログの作成年間を通して高品質なバラ部会全体で翌年に栽培する経費、品質統一のための資材経費を補助する。

均一化の研修会に取り組み。県は出荷規格のマニュアルや商談用カタログの作成経費、品質統一のための資材経費を補助する。

秋ごろの統一目指す

経営改善には単価アップも欠かせない。オリジナル品種を積極的に市場に投入して高単価を実現している「メルヘンローズ」（玖珠町）も部会に加わる。部会全体で新品種を栽培すると



オリジナル品種の開発で国内有数の「メルヘンローズ」のバラ園（左から）小畑和敏社長（55）が人目を引く。バラ生産者は規格、販売方法も統一して県域で売り

いったり取り組みも展開して、底上げを図る。小畑和敏同社社長（55）は「定番商品の供給で一定収入を確保することは必要だが、攻めの姿勢がなければ生き残れない」と強調する。国内のバラ市場は景気低迷で縮小が続いている。生産者は大規模低コストで生産する輸入品に押され、燃料代の高騰にも苦しむ。県によると、1999年に26鉢（全国4位）だった県内の作付面積は、2012年に15・3鉢（同7位）に減っている。

バラ部会の渡辺昌巳部会長（58）は「九重町は『生産者』はそれぞれ有益な情報を持っている。連携を深めて県全体で生き残りを図る」と話している。

(2013年6月14日朝刊1面)

①県内のバラの作付面積は全国何位でしょう。記事中から順位変動を見よう。

.....

.....

.....

.....

②生産者がまとまることによる強みとは何でしょう。

.....

.....

.....

.....

③「スケールメリット」を生かすためには、どういう取り組みをしたら良いでしょう。話合ってみよう。

.....

.....

.....

.....